

公益財団法人大学セミナーハウス

平成 24 年度主催セミナー事業実施報告

事業名	第 39 回国際学生セミナー
期日	11 月 24 日～25 日（土～日）
主題	東アジアを考える
対象	大学生、留学生
趣旨	いま東アジアは少なくとも経済面では世界の中心の一つになり、日本・韓国・中国・台湾に生まれた人々は日常的往来が茶飯のことになっている。そこには、20 世紀前半の歴史が遺した瑕も遺っているが、他方では史上初めて、人々が同じ「地域」に暮しているという実感とお互いへの関心を持ちだしてもいる。このセミナーでは、この「東アジア」という地域がどのようにして生まれ、今後どのような問題に直面するだろうか、これを長い歴史的な視野から共に考えてゆきたい。
講師・企画委員	三谷博（東京大学大学教養学部教授）** 金美德（多摩大学経営情報学部教授）** 小松久男（東京外国語大学総合国際学研究院教授）** 李成市（早稲田大学文学学術院教授）** 上田信（立教大学文学部教授）**
定員	50 名
参加者	50 名（留学生 15 名）

（注）**印は企画委員を兼ねた講師

事業名	第1回 EU セミナー
期日	9月28日～30日（金～日）
主題	岐路に立つヨーロッパ—EUのガバナンス—
趣旨	<p>一昨年以来のユーロ危機はEU統合に内包された構造的不均衡を改めて問題視する機会となった。我が国においては統合について悲観的な論調が一気に強まったように見える。しかし統合の試行錯誤はこれまでの統合の歴史で繰り返されてきたところである。困難に際して、加盟国の間で常に統合を前進させようという、いわば「政治的意思」が存在するからこそ困難の克服は可能となったのである。「グローバル化」の時代においては世界が同じ問題を共有し、克服していくプロセスが様々な形で拡大していく。それぞれの地域によってそのあり方は違っていても大きな流れとし、同じ地域の諸国の間での協力は不可欠である。</p> <p>本セミナーは以上のような関心から、特に若い人々が日本の内外情勢を考えていく上での思考の一里塚として、EU統合をより広く理解していくことを意図して、今年から始まるプログラムである。第一回目にあたる今年のセミナーは、「EUガバナンス」をテーマに経済・通貨、政治統合、EU法、環境問題、EUの対外関係などの個別のセッションを設けて、個別の議論を行うと同時に、全体会議でEUのガバナンスとは何かを考えてみる。駐日欧州連合大使にもご講演いただく。学生諸君の多数の参加を望んでいる。</p>
講師・企画委員	<p>マエヴ・コリンズ(駐日欧州連合公使・副代表)</p> <p>渡邊啓貴(東京外国語大学教授)**</p> <p>小久保康之(東洋英和女学院大学国際社会学部教授)**</p> <p>田中素香(中央大学経済学部教授・日本EU学会理事)**</p> <p>蓮見雄(立正大学経済学部教授)**</p> <p>押村高(青山学院大学教授)**</p> <p>中西優美子(専修大学教授)**</p> <p>福田耕治(早稲田大学政治経済学部教授)**</p>
定員	80名
参加者	74名

(注) **印は企画委員を兼ねた講師

事業名	第1回デジタルアートセミナー
期日	10月13日～14日（土～日）
主題	openFrameworks で学ぶ、クリエイティブ・コーディング
趣旨	<p>実践的なクリエイティブ・コーディング環境として、デジタルアートを学ぶ美術大学の学生から、プロのアーティストやクリエイターまで、数多くの作品制作に使われる openFrameworks。その openFrameworks を題材にした国内初の本格的な宿泊型セミナーを開催します。</p> <p>このセミナーでは、これから openFrameworks を学びたい初心者向けのワークショップはもちろん、すでに本格的な作品制作に利用しているプロのアーティスト・クリエイターにも役立つ実践的な内容の講義も同時開講し、参加者は自分に合った内容を選択することができます。</p>
講師・企画委員	藤本直明（東京工芸大学非常勤講師）** 田所淳（多摩美術大学・千葉商科大学・東京芸術大学非常勤講師） 神田竜（京都造形芸術大学非常勤講師）
定員	30名
参加者	48名

（注）**印は企画委員を兼ねた講師

事業名	第 53 回大学教員セミナー
期日	9 月 13 日～14 日（木～金）
主題	大学生の学修時間の確保について考える
趣旨	<p>平成 23 年度は、東日本大震災の影響もあって、大学教員セミナーは中止となり、今回 2 年ぶりの開催となりましたが、この間にも大学改革は加速度的な進展を見せつつ進行しています。</p> <p>今年 3 月の中教審「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（審議のまとめ）」では、学生の主体的な学びの確立が提起され、その始点として「学修時間」の確保が求められています。また、6 月に出た文科省大学改革実行プランでは、大学教育の質的転換やグローバル化に対応した人材育成などについて、本年度から直ちに取組むべき課題を含めて、具体的にわたる政策当局の意思が表明されています。</p> <p>これらは、従来からの大学改革の動きの一環であるとともに、改革課題がわれわれ大学教員の具体的活動の世界にまで及んできているという点で、大学の将来に関わる大きな節目であるとも捉えなければなりません。</p> <p>このような改革への強い環境作りの中で、これらの改革案の有用性と問題点を明らかにし、とくにテーマとして設定した「学生の学修時間の確保」について、現場感覚も含めて徹底討論することによって、今後の大学および大学教育の在り方を考えてまいりましょう。教員のみならず大学の将来に関心ある多くの方々の積極のご参加を期待いたします。</p>
講師・企画委員	荻上紘一（大妻女子大学学長） 吉田 文（早稲田大学教育・総合科学学術院教授） 北原和夫（東京理科大学大学院科学教育研究科教授） 山上浩二郎（朝日新聞専門記者） 山本眞一（桜美林大学大学院教授）* 上野 淳（首都大学東京副学長・教授）* 松塚ゆかり（一橋大学教育研究開発センター教授）* 杉谷祐美子（青山学院大学教育人間科学部教授）*
定員	40 名
参加者	29 名

（注）*印は企画委員

事業名	第2回新任教員研修セミナー
期日	9月3日～5日（月～水）
趣旨	<p>各大学では、それぞれの実情に応じて、様々なタイプの新任教員研修が実施されていますが、実際に行われている授業の教育内容にまで踏み込んだ研修を実施している大学は希であるように思われます。一般論としては、各授業の教育内容は、各大学の建学の理念（教育目的）、各教育課程の到達目標、その授業のカリキュラム上の位置と、その授業を受ける学生の平均的学力と当該学問分野に関する既習の知識・技能との関係によって定まると言うことができます。しかし、ユニバーサル・アクセスの時代を迎えた現在の大学には、たとえば、入学者選抜方法の多様化による平均的学生の学力と学習意欲の低下、学習に集中できない学生の増加、就職活動の長期化に伴う実質的な学習時間の減少、卒業生の資質（即戦力）に対する社会的要請の高まり、長期不況下の就職難による学生の目的喪失など、シラバスの作成や実際の授業実施に際して考慮すべき多くの困難が介在しています。私たち大学教員は毎日の授業の中で、恐らく20年前の教員なら予想することも出来ないような事態に直面し当惑していると言えましょう。周知のように、大学教員研修の重要な課題の一つとして授業開発があり、主として教育方法に関する研修が行われてきました。しかし、この種の研修が念頭に置いていたのは、主として知識・技能伝達型授業であり、いかにして学生に一定程度の知識・技能を習得させるかを直接の目的としていたように思われます。これに対して、ユニバーサル・アクセスの時代の授業開発の目的は、いかにして種々の困難を克服して学生の学習意欲を高め、能動的に授業に参加させるかにおく必要があるように思われます。言い換えれば、中央教育審議会の答申等に見られるように、自ら問題を発見してそれを解決するという課題探求能力の育成が、現在の大学教育の課題とされています。しかし、この課題を解決するためには、まず眼前の様々な困難を実践的に克服しなければなりません。そして、そのための適切な方策は、何よりも同じ悩みを共有する同僚教員の相互研修であると考えます。大学セミナーハウスは、大学教員相互の交流を図ることによってわが国の大学教育の向上・発展に寄与することを目的としていますが、このたび（社）学術・文化・産業ネットワーク多摩との共催で国公立大学 の枠を越えた合宿形式の新任教員研修を企画しました。今回のセミナーの主要な目的は、(1)ユニバーサル・アクセスの時代の大学教員にふさわしい教育方法をある程度身につけること、(2)所属大学（学部）の教育目的と受講学生の能力とニーズに見合った内容を持つ授業を構想し実施するための必要最小限の能力を習得することにあります。さらに、(3)前期（春学期）の授業に対する学生の授業評価に基づいて、学生が不満に思う事項を改善するための実行可能な方策を見出すことを具体的な到達目標とします。</p>
講師・企画委員	<p>小川哲生（明星大学学長） 村山光子（明星大学学生サポートセンター長） 生田 茂（大妻女子大学社会情報学部教授）** 井下理（慶應義塾大学総合政策学部教授） 荒木晶子（桜美林大学リベラル・アーツ学群教授） 菊地滋夫（明星大学人文学部教授）** 林 祐司（首都大学東京准教授）* 史 傑（電気通信大学情報理工学部教授）* 井上史子（帝京大学高等教育開発センター准教授）* 坂井昭宏（桜美林大学リベラル・アーツ学群教授）*</p>
定員	50名
参加者	42名

（注）*印は企画委員、 **印は企画委員を兼ねた講師

事業名	第 26 回大学職員セミナー
期日	7 月 13 日～14 日（金～土）
主題	大学職員の挑戦と実践—職員が変われば大学は変わる II—
趣旨	<p>大学を取り巻く環境の急速な変化とそれに伴う大学改革の進展によって、近年、大学職員の役割や業務の在り方が大きく変化しはじめています。この状況を踏まえ、2011 年度開催の職員セミナーでは、職員の可能性を引き出す SD の実践例（山形大学）や、職員自らが企画し学生支援やプロジェクト業務に取り組んで成果をあげたケース（法政大学、早稲田大学）の事例報告を受け、ワークショップではバーチャル企画の立案作業を経験し、「参考になった」「励まされた」と参加者から好評を博しました。</p> <p>今回の職員セミナーも昨年度に引き続き、職員独自あるいは教職協働によって新たな業務領域に職員が挑戦し実践している姿にスポットをあて、それを素材にワークショップで具体的な企画を考える作業を通して理解を深めることを目標とします。事例報告に加えて参加者の事前レポートも素材に、なぜそうした取り組みが可能になったのか、これらの取り組みにおいて教職協働や職職協働はどのように実践されているか、課題は何かなどを自由な環境の下で多彩な視野・視点を交錯させ活発に議論します。さらに、自らも大学職員として奮闘してこられた経験をもつ文部科学省松坂浩史氏（私学経営支援企画室長）の職員への熱い思いと励ましを込めた特別講演によって、元気を得、自ら実践する第一歩にしてほしいと考えています。</p> <p>この職員セミナーは、国公立大学の職員がその設置形態を超えて、宿泊をともにしながら密度の濃い時間を共有し語り合うことのできる唯一の「場」といってもよいでしょう。このことによって、これまでも参加者同士のネットワークが形成され、職場に戻った後も国公立を超えた活発な情報交換が生まれています。今回は、事例報告者、特別講演者も宿泊し情報交換会にも参加されます。</p> <p>全国の意欲ある大学職員の方々の積極的なご参加をお待ちしております。</p>
講師・企画委員	高辻智長（明治学院大学学生課） 友松 修（広島経済大学興動館課長） 松坂浩史（文部科学省高等教育局視学館官・私学経営支援企画室長） 横田利久（中央大学横浜山手改革推進室担当部長）* 山本眞一（桜美林大学大学院教授）* 近藤清之（法政大学入学センター部長）* 青木加奈子（東京経済大学学務部）*
定員	50 名
参加者	37 名

（注）*印は企画委員

事業名	第 27 回大学職員セミナー
期日	12 月 7 日～8 日（金～土）
主題	大学職員の挑戦と実践—職員が変われば大学は変わるⅢ—
趣旨	<p>大学を取り巻く環境の急速な変化とそれに伴い大学改革が進展するなかで、近年、大学職員の役割や業務の在り方が大きく変化してきています。この状況を踏まえ、職員セミナーでは 2011 年度から「大学職員の挑戦と実践—職員が変われば大学が変わる—」をテーマに、先進例として、職員の可能性を引き出す SD の実践例（山形大学）、職員自らが企画した学生支援やプロジェクト業務（法政大学、早稲田大学、明治学院大学）、教職協働による学生の人間力育成の取り組み（広島経済大学）といった事例報告、そして事例報告を材料にしたワークショップを展開しました。ワークショップはバーチャル企画の立案作業を行うというもので、参加者は自大学への応用を念頭に置きながら活発な議論を交わし、「意欲が湧いた」「励まされた」「自大学に応用したい」等、好評を博しています。</p> <p>今回の職員セミナーも引き続き、職員自らが企画した学生の学びと成長支援さらには学生サービスの分野において数々の先駆的な実践をしてこられた立教大学の取り組みにスポットをあて、これを素材にワークショップで具体的な企画を考える作業を通して、課題の理解と参加者同士のコミュニケーションを深めることを目的とします。事例報告に加えて参加者の事前レポートも素材に、なぜそうした取り組みが可能になったのか、これらの取り組みにおいて教職協働や部局連携はどのように実践されているか、課題は何かなどを自由な環境の下で多彩な視野・視点を交錯させ活発に議論します。さらに、2 日目の特別講演では、私学事業団職員として長年私学経営支援に取り組むとともに、本年 3 月まで文部科学省私学部にも出向され全国各地の大学経営の実態と大学職員の奮闘ぶりをつぶさにみてこられた菊池裕明氏（経営支援室長）に、現場で頑張る職員への熱い思いを語っていただくことによって、元気を得、自らが実践する第一歩にしてほしいと考えています。</p> <p>本職員セミナーは、国公立大学の職員がその設置形態を超えて、宿泊をともにしながら密度の濃い時間を共有し語り合うことのできる唯一の「場」といってもよいでしょう。これまでも参加者同士のネットワークが形成され、職場に戻った後も国公立を超えた活発な情報交換が生まれています。全国の意欲ある大学職員の方々の積極的なご参加をお待ちしております。</p>
講師・企画委員	<p>松井明子（立教大学新座キャンパス事務部長）</p> <p>菊池裕明（日本私立学校振興・共済事業団経営支援室長）</p> <p>松坂浩史（文部科学省高等教育局視学館官・私学経営支援企画室長）</p> <p>横田利久（中央大学横浜山手改革推進室担当部長）*</p> <p>山本眞一（桜美林大学大学院教授）*</p> <p>近藤清之（法政大学入学センター部長）*</p> <p>青木加奈子（東京経済大学学務部）*</p>
定員	50 名
参加者	43 名

（注）*印は企画委員

事業名	大学教員のためのプロフェッショナル・ディベロップメントセミナー (PD セミナー)
期日	6月23日～24日 (土～日)
主題	学生が授業を受けたいくなるシラバス作り
趣旨	<p>シラバスには、「学生の視点」に立ったものと、「教員の視点」に立ったものがあることをご存知でしょうか。教員みなさんのシラバスはどちらでしょうか。どの視点に立つかで授業目標、授業方法、そして成績評価も大きく違ってきます。北米の大学教員は、シラバス作りに約3ヶ月を費やすといわれるほど、これを重要なドキュメントと位置づけます。</p> <p>周知のように、『大学設置基準』の一部改正により、ファカルティ・ディベロップメント (FD) が義務化されたことを踏まえて、中央教育審議会大学分科会は「学士課程教育の構築に向けて」(平成20年12月24日) 答申を出しました。この答申は、国際的な大学改革の流れに対応して「学習成果」を明確にし、教員が「何を教えるか」よりも、学生が「何ができるようになるか」に力点が置かれたもので、授業形態の抜本的な見直しが求められます。具体的には、教育課程において「一方的に知識・技能を教え込むのではなく、豊かな人間性や課題探求能力等の育成に配慮した教育課程を編成・実施する」ことが求められます。9割以上の大学でシラバス作成が実施されているにもかかわらず、十分に機能していないというのが実情です。原因の一つとして、シラバスと単位制が連携していないことがあげられます。たとえば、シラバスに「準備学習等についての具体的な指示」を盛り込んでいる大学は未だに少なく、学生が必要な準備学習等を行ったり、教員がこれを前提とした授業を実施したりする環境にない現状を省みてシラバスのあり方を検討することが提言されています。</p> <p>「学習成果」についても、多面的に評価する「仕組み」の「学習(ラーニング)ポートフォリオ」の導入および活用が提言されています。</p> <p>本ワークショップでは、上記の提言を踏まえ、「学生が授業を受けたいくなるシラバス作り」を目指します。学生の視点をシラバスに反映させるために、授業に関するトレーニングを受けた学生の参加による教員と学生の相互研修 (Students Consulting on Teaching ; SCOT) を行います。</p>
講師・企画委員	土持 ゲーリー 法一 (帝京大学高等教育開発センター長) ** 井上史子 (帝京大学高等教育開発センター准教授) *
定員	50名
参加者	42名

(注) *印は企画委員、 **印は企画委員を兼ねた講師

事業名	第9回古代史セミナー
期日	11月10日～11日（土～日）
主題	日本古代史・新考—由自在（その5）—
趣旨	<p>一 わたしは今日も生きている。なぜか。おそらく運命の神がわたしに対して、「期する」ところが残っているからであろう。</p> <p>昨年、わたしは書いた。「この本を書き終えたら、いつ死んでも、悔いるところはない。」と。畢生の書としての『卑弥呼』（ミネルヴァ書房刊）の原稿を書き終えたときである。五月末、三十一日だった。</p> <p>爾来、一年間をすぎ、上の書も公刊を見た。しかも、わたしはなお生きている。神は、あるいは仏は何を求めたまうのであろうか。</p> <p>二 この一年間の収穫は多彩だった。</p> <p>先ず、尾崎康著『正史宋元版の研究』（汲古書院刊）だ。わたしが尊重した、三国志の「紹熙本」（宮内庁書陵部蔵）に対し、忌憚のない批判が展開されていた。その一つ、ひとつが「逆転」してゆく、新たな再批判の醍醐味。久しぶりに堪能した。</p> <p>三 次は「邪馬壹国」。誰がこの国名を書いたのか。——卑弥呼その人だ。彼女の国書（上表文）の中の一語だった。「豆（とう）」は、神を祭る器具。「土」は「仕」（仕事とする）。「一」は器具の上の台板。それらを「合わせた」のが、この「壹」の字なのである。</p> <p>陳寿はそれを知っていた。だから「俎豆の象、存す。」と。序文（三国志の序文。いわゆる「東夷伝序文」）に書いた。</p> <p>「邪馬壹国」の一語は、陳寿にとって「三国志全体の中核となる」キイ・ワードだったのである（二〇一二年七月二十日の発見）。今回、詳述する。</p> <p>四 次は和田家文書。大きな進展があった。「寛政原本」の発見は、この八王子の大学セミナーの最中での「事件」だったが、この文書が日本の歴史全体にとって占める、枢要の位置が段々と明らかになってきた。第一、「日本」という国号は、日本列島の「中」で“思いつかれた”ものではない。当然のことだ。列島内に住む住民が「自分のところから、太陽が登る」などと思うはずはない。「高天原」（タカアマバル）寧波（ニンポー）の地、いわゆる会稽山の下、杭州湾の人々（海土族）の「目」で、眼前の対馬海流（黒潮分流）の向う（東側）を指して「日ノ本」と呼んだのである。和田家文書を「日の本文書」と呼ぶ（久慈力氏）のも、偶然ではない。</p> <p>明治維新以降のイデオロギー、「天皇家一元史観」の霧が晴れはじめたのである。</p> <p>明日、わたしのいのちが終っても、「青天白日」の未来は、近い。</p> <p style="text-align: right;">——二〇一二年七月二十一日記——</p>
講師・企画委員	古田武彦（歴史学者）** 荻上紘一（公益財団法人大学セミナーハウス館長）*
定員	60名
参加者	87名

（注）*印は企画委員、**印は企画委員を兼ねた講師

事業名	第5回教員免許状更新講習
期日	8月4日～7日（土～火）
主題	
趣旨	教育の現在に対応し、明日の実践に活かす。教師としての成長に応える。本講習は、延べ4日間の短期集中で実施します。講師は、教育経験豊かで探究心旺盛な「現役・元大学教師」が務めます。充実したカリキュラムに加えて、自発的な受講者相互の交流の楽しみもあります。
講師・企画委員	安田忠郎（教員免許更新センター長）** 高垣マユミ（実践女子大学生生活科学部教授） 内藤昌孝（神奈川工科大学顧問） 小川彩子（州立シンシナティ大学助教授） 山内芳文（聖徳大学児童学部教授） 吉田真史（東京都市大学知識工学部教授）
定員	60名
参加者	67名

（注）**印は企画委員を兼ねた講師

事業名	第6回教員免許状更新講習
期日	12月24日～27日（月～木）
主題	
趣旨	教育の現在に対応し、明日の実践に活かす。教師としての成長に応える。本講習は、延べ4日間の短期集中で実施します。講師は、教育経験豊かで探究心旺盛な「現役・元大学教師」が務めます。充実したカリキュラムに加えて、自発的な受講者相互の交流の楽しみもあります。
講師・企画委員	安田忠郎（教員免許更新センター長）** 高垣マユミ（実践女子大学生生活科学部教授） 内藤昌孝（神奈川工科大学顧問） 小川彩子（州立シンシナティ大学助教授） 山内芳文（聖徳大学児童学部教授） 吉田真史（東京都市大学知識工学部教授）
定員	60名
参加者	81名

（注）**印は企画委員を兼ねた講師

以上